

甲府法人会館(旧甲府商業会議所ビル) (甲府)

旧甲府商業会議所の威厳をにじませる重厚な造りの甲府法人会館大ホール。天窓のデザインが目をひく(撮影・赤池宗治)



山梨100選

4

ときめく21世紀

〈次回は28日付に掲載します〉

経済発展を支え続ける

「会議場をシンボリス(象徴化)するための工夫が、ほらあそこ(に、ほらここ)に」。建築家の久保田要さん(69)は、旧柳町筋と鍛冶町筋の交差点から、街並みの景観にとけ込んだ一つのビルの姿を分析する。

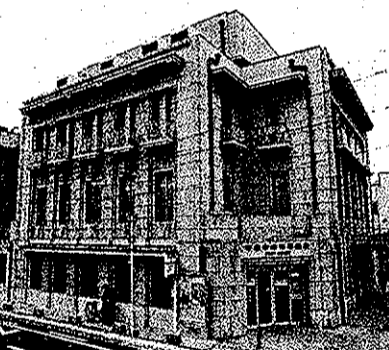
現代風に言えば「コンベンション・センター」そのものだという。会議場であるホールを核に、建物全体が「スクエア(広場)機能を持つように、自由に行き来できる空間が配置された。最上階に多目的なコンベンションスペース、二階に事務局機能、一階に物産陳列ゾーンと食堂や酒場の飲食テナントがあてられた。

街角から人が流れ込んで出て行く。会議が開かれ、物歴史としていた。趣意書からも建設目的がコンベンションにあったことが歴然としていた。

「建設地を市の中央である柳町に、鉄筋コンクリート三階建て洋館とし、本会議所物産陳列館および各事業組合事務所を含み、諸多の公会や各種集会所に供する。これにより都市の面目を發揚し、本市唯一の社交機関たらしめんとす」

趣意書からも建設目的がコンベンションにあったことが歴然としていた。

「箱物」を建設するのでなく、商工業者が「生き方」そのものを構築していったのがこの建物だったと、久保田さんは説く。



会議場を核にした設計が随所に見える甲府法人会館。いずれも甲府市中央4丁目

大正末期の甲府市中心部



関東大震災による経済的打撃と昭和恐慌のあらしを目前に、中央線の電化促進や身延線の建設など社会基盤整備が、経済界に新たな視点を開かせていた。

入金を合わせ三十万円の資金を確保。二五年四月十九日着工、翌二六年四月二十日完工した。設計と工事は建築家内藤半次郎が心血を注いだ。久保田さんと大ホールの内部を見た。外観は垂直に伸びる直線的なプロポーションだが、内部は、当時欧州ではやっていた装飾美術アルテュロの曲線的なフォルムが随所に顔を出す。人造大理石のステージは聴く側に向かって真ん中が膨らんだカーブを描く。ステージ正面の北窓からは商工業本拠地が一望できた。

〈赤池 宗治〉